長崎大学大学院教育学研究科
教職実践専攻

令和２年度

教育研究成果報告書

令和３年３月

はじめに

コロナ禍、教育実践研究、艱難汝を玉にす

新型コロナウィルスが令和２年１月頃から全国各地に拡散し始めて一年余。今もなお猛威を振るっており、大学院修了者には激動の一年であった。多事多端のなかにあって、実習を行うことには制約も多く、学びの深化にはご苦労のあったことと察したい。

実習では、コロナウィルスの感染対策を通じて学校、学級における危機管理を身をもって体験したことと想像する。危機管理上制約のかかった実習のなかで学んだことは、通常では経験できない財産である。実習を省察し議論を通じて得た学びは、教育実践研究の知見として、ポストコロナにおける学校教育に生かして欲しい。ストレートマスターの諸君は、コロナ禍による児童生徒の様子、学校の動き、時には保護者や教育委員会との相互連絡など、通常では見聞きできない経験ができたことであろう。艱難汝を玉にす。非常時における学びを大切に持ち続けて欲しい。

以下は、昨年の本報告書にも記したことであるが、基本的なことと考えるので、改めて記しておきたい。

教育実践研究は、一般的に言うと、(1) 児童や生徒の学びの実態を十分踏まえて授業の状況を省察し、(2) 児童・生徒の学びに合わせて学問的理論や知識を再構築し、(3) 授業内容や授業方法を改善・開発するという手順を踏む。その中心にあるのが児童・生徒の学びであることは言うまでもないが、学びの発展深化のためには、実践展開に即して実態を記録し、より深く検討していくことが不可欠である。検討する際には、ひとりよがりのドグマに陥らないよう、実践の意味や内容を周囲と絶えず議論し共有することが重要である。そうした実践の営みを積み重ね、他者と比較し相対化することで、実践研究の理論化が可能になるように思う。これら営みの繰り返しを「学校教育における理論と実践の往還」と呼ぶ。理論と実践の往還では、教育課題に関する様々な事例を構造的、体系的にとらえ直す（再構築する）ことが肝要である。また、児童・生徒、学校の実態を踏まえて、事例研究、授業観察・分析、模擬授業、ロールプレイング、フィールドワーク（現地調査）等を試みることが有効である。これらの過程を通じて自らの実践を検証し他者と議論することにより実践研究は深みを増す。ここまで述べてきたことは、以前「学校教育実践実習の手引き」に書いたことに重なるが、大学院で実践する基本的な「型」であると思う。

院生諸氏は修了後に、本誌にまとめた研究成果を実習協力校、勤務校、地域等に還元し、広く意見を求めることにより、自らの学修を深めて欲しい。本誌に掲載された実践研究は、いずれも院生諸氏の努力によるものであるが、長崎県教育センター、県内の各公立学校、本学部附属学校園の温かいご支援とご指導によって成しえたものであり、それらなしでは成しえなかったものである。県教育センターや各学校の諸先生方を始め、県・市・町教育委員会の関係各位に感謝の誠をささげたい。真に有難うございました。

令和３年３月
長崎大学大学院教育学研究科
研究科長　　松元　浩一

目　　次

はじめに

学校教育実践実習の概要と報告 …… 1

大学院生による学校教育実践実習の報告

実　習　1 …… 2

実　習　2 …… 3

実　習　3 …… 4

実　習　4・5 …… 5

学校教育実践実習の振り返り …… 6

授業デザイン演習・学校組織マネジメント演習 …… 8

フォーラム・パネルディスカッション 2020 ……10

教育実践研究成果の発表概要 ……15

学校教育実践実習の概要と報告

学校教育実践実習のねらい

学校教育に関する基礎的・理論的な理解の上に、学校の教育活動全般を主体的に経験し、省察すること。また、学級経営、授業実践、生徒指導、教育相談等にかかわる課題や問題に関し、指導教員の指導の下で自ら立案した計画に沿って解決策を実践し、経験することで、学校におけるさまざまな課題に主体的に取り組むことのできる資質能力を培うこと。

構成

・学校教育実践実習１　（学級経営、生徒指導）
・学校教育実践実習２　（学級経営、授業実践）
・学校教育実践実習３　（生徒指導、教育相談）
・学校教育実践実習４　（各コース実践研究）
・学校教育実践実習５　（各コース実践研究）

学校教育実践実習の内容

教職大学院における教育実習は、大学院生が学校の教育活動全般を経験できるように、「学校教育実践実習１～３」において、便宜上、実習ごとに中心的な内容（学級経営・生徒指導、学級経営・授業実践、生徒指導・教育相談）が定められており、大学院生は、これらの実習を含む全ての実習（「学校教育実践実習１～５」）において、主体的にテーマを設定し、実習の計画を作成し、積極的に取り組むことが求められている。

学校教育実践実習１（学級経営・生徒指導）

目標

学校、学年、学級の教育目標を達成するための条件整備の力量を向上させるために、物理的環境整備と人間関係的条件整備に関わる資質や能力の向上を目指す。また、児童・生徒理解に基づく生徒指導等に必要な資質や能力の向上を目指す。

実習内容

学級経営補助や基本的生活習慣づくりの補助など、学級担任教師の活動の観察や補助活動を通して、学級経営の意義と実際について理解を深め、実践できるようにする。また、各教室の掲示物、児童・生徒の座席配置、安全への配慮などを、観察や担任教師からの聞き取り等を通して理解し、実践できるようにする。

また、児童・生徒の行動観察や指導補助を通して、一人一人の児童・生徒の個性や集団としての特徴などについて、さらに児童・生徒が学校生活、学級生活に満足感を持ち、楽しい学校生活を作っていくための条件などについて理解を深め、集団づくりやソーシャルスキルを育てるための手だてを修得する。

院生による学校教育実践実習１の報告

佐藤　萌々（子ども理解・特別支援教育実践コース）

実習１は、「知的障害の重い子どもの実態把握と特性・発達段階に応じた指導のあり方に関する実践研究」をテーマに、附属特別支援学校の生徒を対象に行った。担任・副担任への聞き取り、検査の視点からの観察、実習での関わりから対象児の実態把握を行った。その上で、教師が行った実態把握の結果を見せていただき、自身の結果と比較することで、実態把握に欠けている視点を学ぶことができた。

生徒指導においては、体調管理の大切さを学んだ。対象生徒は、熱がこもりやすい体質で、体調不良を自ら伝えることができないため、体調面について配慮が必要であった。教師は、毎日保護者と体調について情報共有したり、熱を定期的に測ったりするなど、生徒の様子を細かく観察し、体調の変化に気づくことができるようにしていた。毎日の指導・支援を行う上で、体調管理の視点も必要不可欠だと実感した。実習１の学びを来年の実習、そして現場で生かしていきたいと思う。

学校教育実践実習２（学級経営・授業実践）

目標

学校、学年、学級の教育目標を達成するための条件整備の力量を向上させるために、物理的環境整備と人間関係的条件整備に関わる資質や能力の向上を目指す。また、指導計画や学習指導案の作成、授業実践等を通して、教師としての使命感や教育観をより強固に形成するとともに授業力の一層の向上を目指す。

実習内容

学級経営の計画、学校の組織運営（校務分掌）の在り方について演習を通して理解するとともに、学級づくりのためのソーシャルスキル訓練の実習、討論を通しての話し方・聴き方の育て方等の能力の向上を図る。さらに、学級通信の作成補助などを通して家庭と連携する力量を高める。また、事例研究などを通してＰ（計画）―Ｄ（実施）―Ｃ（評価）―Ａ（改善）のマネジメントサイクルによる実践ができるようにする。

また、教育課程編成の在り方や運営、具体的取組について実践的に学び、年間（単元）指導計画や学習指導案の作成、学習材の開発、及び授業参観や授業補助、授業実践等の活動を通して、教師の日常の活動を学び、教師としての使命感や教育観をより強固に形成するとともに、授業力を一層向上させる。

院生による学校教育実践実習２の報告

入里　美穂（教科授業実践コース）

県内の高等学校において、授業参観、特別活動への参加、授業実践等、様々な学びの機会を頂き、新たな知見を得た。参観では、生徒の言動の観察、授業者への聞き取り等から思考力・判断力・表現力を高める手立てについて考察した。授業力向上のため、形成的評価をもとに継続的に計画の修正を図ることの重要性を学んだ。学校行事やホームルーム活動では、生徒と交流して実態把握に努め、自身の特別活動の指導を見直す契機となった。

授業実践では、「読むこと」の指導事項の「精査・解釈」に焦点を当て、「多様な資料から得た情報を関連付ける力」の育成を目指した。資料を比較して共通点を考える学習の実践では、アンケートや成果物の分析から、資料の比較が生徒に新たな視点をもたらしたかを考察した。また、生徒の視野と表現の幅を広げる手立てとして、「具体例と着眼点の提示」の効果を検討した。院の講義での学びが、実習時の視野を広げることを実感した。

学校教育実践実習３（生徒指導・教育相談）

目標

児童・生徒理解に基づく生徒指導、教育相談、特別支援教育、キャリア教育等に必要な資質や能力の向上を目指す。また、一人一人の児童生徒のニーズに合った指導・支援についての理解と適切な指導能力を培うことを目指す。

実習内容

児童生徒の持っている力を引き出すために、生徒指導の３機能である「自己存在感を与える」「共感的な人間関係を育成する」「自己決定の場を与える」を適切に位置づけた学級経営や教科指導を計画し実践する。

また、教育相談的視点を生かした集団づくり・授業づくりを計画・実践し、教育上の配慮を必要とする児童生徒への合理的配慮の在り方についても理解し、実践する。

いじめ、不登校等の要因となる指導上の課題を見出し、改善のための具体的方策を考え取り組むなどの実践ができるようにする。

院生による学校教育実践実習３の報告

島　瑞江（子ども理解・特別支援教育実践コース）

実習３では、長崎市内の公立中学校３年生において、道徳の授業実践、教科の授業参観やTT、通級指導教室での対話や活動、学活等での短いSST（ソーシャルスキル・トレーニング）やSGE（構成的グループエンカウンター）を複数回実施した。その中で行ったアサーション・トレーニングや傾聴トレーニングは、コミュニケーション能力の向上と学級の良好な人間関係形成に役立つことを実感した。今後の学級経営においても効果的に仕組み、肯定的な関わり合いができる居心地の良い学級づくりを目指したい。

実習３のテーマである教育相談・生徒指導を意識しつつ、日々の観察を丁寧に行うことで個々のニーズに合った適切な指導・支援方法をより深く考えた。また、学年職員や特別支援学級担任、通級指導教室担任からお話を伺う中で、今必要な支援だけでなく、将来を見据え自分の意志で力強く生きていくためのキャリア教育の視点に基づいた支援の重要性に気づかせていただいた。情報交換を密に行い、チームとなって指導にあたる教職員の姿から多くを学ばせていただき、たいへん充実した実習となった。

学校教育実践実習４・５（各コース実践研究）

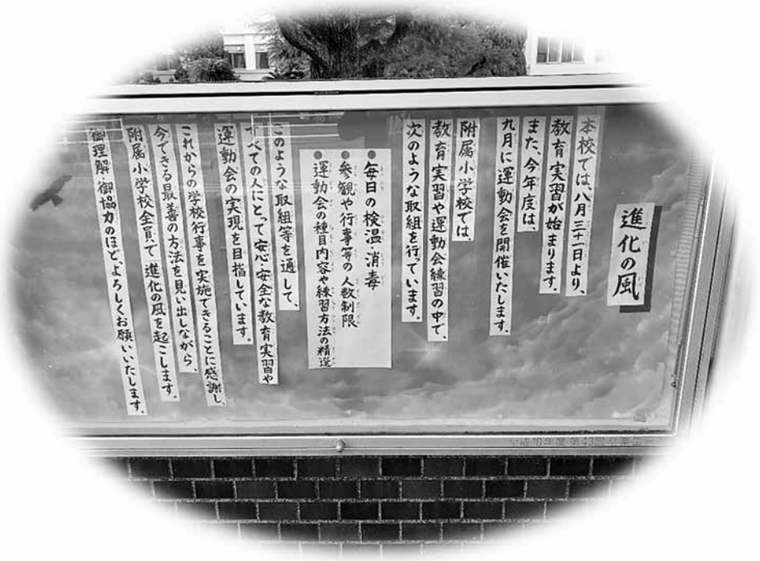
目標

学校教育にかかわる実践研究課題について、自ら立案した計画に沿って解決策を実践し、経験することで、学校におけるさまざまな課題に主体的に取り組むことのできる資質能力を培うこと。また、自ら実施した実践研究に基づいて「実践研究報告書」（最終レポート）を作成すること。

実習内容

受講生は、自らの実践研究課題を設定し、実践研究を中心とする実習を主体的に行うことが求められる。そのため、実践研究課題や研究計画等を記した実習計画書を作成し、計画に沿って積極的に実習を行い、実習終了段階では検証計画に基づき自らの実習を評価し、「実践研究報告書」（最終レポート）を作成する。

学校教育実践実習４、同５の報告は、後述の「教育実践研究成果の発表概要」に掲載されている。



学校教育実践実習先　長崎大学教育学部附属小学校　ある日の掲示板より

学校教育実践実習の振り返り

今年度は、新型コロナウィルスの影響により、学校教育実践実習の日程や内容等の変更を余儀なくされた。実習生にとっては、予定どおり実習ができないばかりか、これまで当たり前のように行ってきたすべてのことの見直しや進路への対応等、その影響は計り知れないものとなった。しかし、「ピンチはチャンス」と言われるように、このような危機的環境に学校がどのように対処しているのかを肌で感じることができたし、また現場の先生方と共に実践できるという貴重な学びの機会として実践実習に取り組むことができた。通常の実践実習では経験できなかった多くのことを学ぶことができ、実習生にとっては一層の飛躍の糧となる貴重な実習であった。

山隈　俊（教科授業実践コース）

実習１．２では、国立Ｘ中学校にて参観をメインに教師がどのように家庭科の知識及び技能を教えているか学び、実習３．４．５では、市立Ｙ中学校にて、手立てを用いた授業実践を多く行い、自分の授業力向上を図った。実習の中で、授業の構想・実践を重ねるたびに、多くの指摘や反省を得た。それらを活かして、実際に様々な指導方法を実践することのできる機会があったことで、授業実践力が以前と比較すると向上した。しかし、まだ拙いものである。今後も、向上できるように、日々の実践を積み重ねたい。

また、実習で一番学んだことは生徒理解の方法である。自分は現場で勤めている先生方は、経験を活かし生徒理解の方法を確立しているものであると考えていた。しかし、そのような便利な方法はなく１人１人の生徒に真摯に向き合うことが生徒理解の一歩であることを学ぶことができた。

片山　桂維（学級経営・授業実践開発コース）

これまで、実践実習１・２で附属小学校、実践実習３～５で長崎市内の小学校にお世話になった。各実践実習では、各々が設定したテーマに沿って観察や授業実践をさせていただいた。学部時の実習とは異なり、長期間にわたって学校に携わり、子どもと触れ合うことができるため、子どもの成長を感じつつ、教員としての資質をより育むことができた。

実習１・２では、日々の授業実践の中から研究的視点をもった手立てを見取ることができ、自身の観察する視点を鍛えることができた。さらに、学部３年生の実習生と期間を共にすることで、中間管理職的位置での実習ができた。自身の授業実践のみならず、後輩の授業実践の支援を通してより広い視点での視座を得ることができた。

実習３～５では、初めて公立の小学校における長期的な実習を経験できた。実習の中では、日々の観察だけではなく校内研修や校務の手伝いを通して、学校職員としての経験も積むことができた。また、学級懇談会に参加することで、ある保護者の方から「子どもが毎週火曜日（実習日）を楽しみにしている。」というありがたい言葉をいただき教員のやりがいにも触れることができた。さらに、新型コロナウィルスへの対応についても間近で見ることができ、緊急事態下における学校対応についても知ることができた。

各実践実習に共通して、実習期間終了後も迎えていただき、温かい雰囲気での実習に臨めたことや、子どもたちが私を信頼して、ともに遊び、ともに学べたことに深く感謝している。これからの教員人生でも初心を忘れず感謝の心をもって邁進していきたい。

脇田　将（子ども理解・特別支援教育実践コース）

全５回、約２年間にわたって、教育学部附属特別支援学校と市内の公立小学校にて教職実践実習を行った。教職実践実習では、教育学部での教育実習とは違いより深く教育について考える機会となった。教育学部で行った１か月間の教育実習では、初めての授業づくりや毎日の実習をこなすことにいっぱいいっぱいで、気づいたら終わっていたというのが正直な感想である。教職大学院での実践実習は、週に１回ということもあり、学校の現状や、教職員の動き、子どもたちの実態把握などを観察や実践、それに伴う省察を時間をかけて行うことができ、俯瞰して教育について見つめなおす機会となった。また、現場の先生方や子どもたちのリアルな声を聞いたり、教員としてのアドバイスなどもいただいたりして、自分自身の教員になるための自覚や士気も高まり、教員になるためのとてもよい準備期間となった。

元村　義信（管理職養成コース）

実践実習４は、県教育センターで実施される研修にスタッフとして関わる実習と校種別に分かれて行う附属小・中学校における実習であった。教育センターでは、長崎県教育委員会が策定した「長崎県教職員研修計画」に基づいて実施される初任研、中堅研、新任教頭研、新任校長研に関わることができ、各ステージにおける具体的研修の仕組や意義、意図を学ぶことができた。校種別の附属学校での実習は、管理職養成コース所属の個々人にとって研究内容や方向性を見出すよい契機となった。実践実習５は、４附属校園のうち３校園で行う実習と校種別に分かれての公立小・中学校での実習であった。自分が所属する校種以外の学校での実習を行うことができ、たいへん有意義な学びをさせていただいた。子どもたちがそれぞれの校種でどのような学びを経て成長していくのかを俯瞰的にとらえることができた。管理職として、これらの実態を把握した上で、生涯学習の視点も踏まえて学校経営をしていくことの必要性を体感することができた。

これらすべての実践実習において、現場の管理職の先生方やミドルリーダー、初任者の先生方との「対話」を通して、学校経営の思いや人材育成の思い、授業づくりの思い、子どもたちへの思い等々に触れることができた。学校づくりとして重要な共有ビジョンの構築にはこの対話が必要であるという気づきも本実践実習の大切な学びである。現場での課題を先生方と共有し、多様な対話を通して、未来を切り開く子どもたちを育むことができる力のある学校づくりに取り組んでいきたい。

授業デザイン演習

授業デザイン演習は、児童・生徒の実態や授業の観察、自身の授業実践について、専門性の異なる学生や大学教員との省察を通して、自身の学びを再構築し、教員としての力量を形成していくことを目的として、通年で行っている。

本演習では、学生が実習にて主体的に得た学びを、他の学生や教員らと対話的に省察することで、自身や社会における教育的課題に対する深い学びを喚起している。以下に、本演習を受講した感想を記す。

廣岩　裕香（子ども理解・特別支援教育実践コース）

授業デザイン演習の一番の魅力は、年代、教科、校種など、それぞれの学生（現職教諭含む）の相違の中で、実践実習で学んだ内容を協議し省察することだと考える。専門性が異なるからこそ、多面的な視点からの意見となり、次回の実習への学びへとつながった。繰り返し行った協議により、学びはスパイラル化し、徐々に自身の専門性が拡大されていくことを感じた。教授方が協議に参加していただくのも魅力だと感じた。専門性の高い助言をもとに話し合い、より深い洞察へとつながった。

ストレートマスターの院生からは、現場経験からの意見を求められることもあり、自明と思われた行動や考え方が、これまでの経験からの教師の「立場」であることが多く、「視点」や「立場」の多様性に気づかされた。学校に戻った時に、この講義で学んだように互いの専門性を尊重し、協働できる教師へとさらに成長していきたい。

小川　大輔（教科授業実践コース）

授業デザイン演習では、それぞれが実習で学んだことを開き、時間をかけて議論を行う。メンバーの中には、校種や専門分野が違う学生が混ざり議論を行うため、自分には持っていない新たな視点で意見をもらうことができる。また、現職教員の院生や大学教員から経験や理論に基づいた適切な助言がもらえるため、実習や研究を進める中で非常に参考になる演習であった。私はこれまで大学院の学習した多くの理論と、実習で行った実践があまり結び付けられていないことが多かったが、この演習のおかげで理論と実践を結び付ける習慣が身に付いたと感じている。本演習は、教職大学院のテーマである「理論と実践の往還」を身に染みて体験できる授業であり、今後、教師として成長していくための術を教えてくれた授業であったと感じている。現場にでても他の教員と対話を積極的に行いながら、省察することを通して、成長できるように心掛けていきたい。

濵松　太一（教科授業実践コース）

一年間の授業デザイン演習を通して、自分自身の観察や実践を内省しまとめた記録を、他の校種・教科を専門とする学生や先生方と様々な視点から捉えなおす事で、事象の背景など自分自身が気づけなかった点に気づくことが多くあった。コロナ禍において、他の学生や先生方とコミュニケーションをとる機会が少ない中で、とても貴重な時間であった。特に、特別支援を専門とする学生との演習を通して、個々の児童・生徒の見取りの深さや専門的な知識によるアドバイスをいただくこともあり、今まで自分自身が目を向けてこなかった視点を得ることができた。

また、前期・後期の節目で行った長期的な振り返りは、自分自身の考えの変化に気付くことができ、講義や実習での学びを繋げる機会となった。本講義は今年で終わりとなるが、これからも他の校種・教科を専門とする学生や先生方と対話し、他者を通して内省する機会を大切にし、より広い視点での学びを求めていきたい。

学校組織マネジメント演習

管理職には、①自校の現状を把握し、②進むべき方向性（学校ビジョン）を定め、③学校ビジョン実現を目指した手段を講じるという一連のプロセスを主導する力量が求められている。本演習では、講義・実習で体得した理論・経験を踏まえ、文献講読や演習、ゲストティーチャーの招聘等を通じ、上記①～③のプロセスの在り方を考究するために、通年で行っている。

本演習では、大学院生が学校を組織する視点で主体的に得た学びを、他の大学院生や教員らと対話的に省察することを通して、自身や社会における教育的課題に対する学びを深めている。以下に、本演習を受講した感想を記す。

松田　禎治（管理職養成コース）

本演習を通して、学校目線の考え方、物事の捉え方をしてしまっている自身に気付いた。さらに、自身が偏りがちな傾向や今の立ち位置について、少しずつ明らかになっていった。その理由として、保護者の願いや地域の要請及び社会的動向などの多角的視野から、学校組織や児童・生徒、教師の現状を捉えることが大切であると学んだことが大きい。私たちは、回を重ねるごとに、「対話（ダイアローグ）」の意味理解が深まり、組織をマネジメントする際のキーワードになると自覚できるようになった。

本演習の学びを活かし、それぞれが思い描く学校ビジョンを形成し、実現のための手段を構想するという到達目標にどれくらい近づくことができたのか。その答えは現場にしかない。振り返ると、大学院生同士や教授の方々と真摯に対話できた時間は、とても贅沢であった。大学院での学びを整理し直し、一歩ずつ前に進んでいきたい。

フォーラム・パネルディスカッション２０２０

「これからの時代に求められる力を育む教育実践を目指して
- GIGA スクール構想の実現に向けて - 」

本年度の「教育実践研究フォーラム　in　長崎大学」は新型コロナウィルス感染防止のため、オンライン形式による実践報告発表とパネルディスカッションを実施した。パネルディスカッションでは、長崎大学大学院教育学研究科、木村国広教授をコーディネーターとして、５名のパネラーが、「GIGA スクール構想の実現に向けて」をテーマに、それぞれの立場での現状や課題、今後の可能性や思いを述べ合った。

大学教員の発表では、「GIGA スクール構想」の基本的な理念やその背景、国としてのビジョン等の説明があり、附属校教員の発表では、学校現場の状況や課題、教員の感じている「熱」などが、具体例をもとに示された。教育行政担当者の発表からは、県内の取組状況や今後の見通し、推進の方法や教職員の研修計画等の説明があった。

その後、パネラー同士の意見交換や、４名の大学院生からの質疑に対するパネラーの応答があった。「大学」「行政」「学校」という多方面から「GIGA スクール構想」についての話を聞くことができ、参加者はより理解を深めることになった。オンラインでの２時間弱の時間が、あっという間に感じてしまう、とても充実した学びとなった。以下は、講演・協議や大学院生および教員による研究発表に関する大学院生のコメント等を「ニュースレターNo.18」より抜粋掲載したものである。

（１）実践報告発表について

佐藤　萌々（子ども理解・特別支援教育実践コース）

実践研究発表では、特別支援教育に関する発表を中心に拝見した。附属校園の先生方、先輩方の発表では、丁寧な情報収集やそれに基づく実践計画により、客観的な研究が行われていた。私の研究でも実践する前の段階について綿密に計画していくことが重要だと実感した。また、現在、私が大学院の授業で学んでいることを取り入れて実践をしている研究発表を聞くことができた。授業では、想像しにくいこともあったが、実践を聞くことで活用の仕方や注意点について学ぶことができた。理論をどのように現場で活用していくのかを具体的に考えることができる良い機会となった。様々な方の意見から新たな視点を得ることができ、充実した時間を過ごすことができた。

中村　利菜（子ども理解・特別支援教育実践コース）

私が参加したブースでは、大学院生、大学教員、学校現場の先生方、教育センターの方が、それぞれの立場から意見を出し合う、学びの深まる場であった。私は、自分が専門としている特別支援教育についての発表と、自分の専門とは異なる校種についての発表に参加させていただいた。自分の専門としている校種について学びを深めるだけでなく、他の校種についても学ぶことのできる機会があることで、自分の視点にはなかった新たな考えに気づくことができたり、自分が専門としている校種との繋がりを考えたりすることができた。ここで得られた知見をもとに、自身の研究や姿を見直したい。また、今後の研究や教育現場に出た際に生かしていきたい。

次山　萌（子ども理解・特別支援教育実践コース）

今回のフォーラムは、初のオンライン開催で、参加できる人数に限りがあり、昨年のポスターセッションよりも物足りないのではないかと感じていた。しかし、管理職養成コースの先生方の発表を聞いたことで、学校現場や教育センターなどにおける管理職の先生方の姿勢や目標を知ることができた。また、附属学校の先生方の発表では、子どもたちの反応や授業づくり、授業を行う上での様々な配慮を学ぶことができた。その学びをもとに、自分の授業づくりを振り返ることができた。また、私が参加したセッションでは、活発に意見交流が行われていた。発表者は客観的な意見を得ることができ、参加者は新たな視点を獲得できたため、両者の学びになっている様子が伺えた。

松永　雄平（学級経営・授業実践開発コース）

近年、ますます社会に開かれた教育課程の重要性が説かれる中で、地域や家庭との協働、カリキュラム・マネジメント、大学・教育委員会・附属校園の連携について学ぶことができた。学校教育に求められる役割は多岐にわたり、時代が目まぐるしく変わる中で、学校の連携・協働のあるべき全体像を模索し、子どもたちに求められる資質・能力をどのように育むべきか追究する必要性について示唆を得た。これは、自らの研究テーマとの関わりも深く、研究を一歩前へ進めるものとなった。また、初めてのオンライン開催であったが、様々な立場の方と多くの意見を交わし、多角的な視点から新たな学びができた。

川尻　ゆい（学級経営・授業実践開発コース）

実践研究発表会に参加して、各分野の専門的な知識を得た。発表者は大学院生だけでなく、大学教授や附属学校の先生方もいらっしゃったので、それぞれの立場から様々な視点で「教育」について語り合うことができた。「子どもたちが疑問を持ち、自分ごととして考える」ための、教師の問題提起の仕方や働きかけの重要性について考える機会になった。また、子どもたちの納得解を導き出す方法や、自身の考え方・価値観の変化を実感させる授業展開について具体的な内容を検討する場が多くあることが、教師やこれからの時代を生きる子どもたちにとって必要だと感じた。多方面から教育を見つめることで、自分の視野を広げ学び続ける姿勢を大切にしたい。

江口　敬文（管理職養成コース）

午前中は、様々な立場から、様々なテーマについての発表が予定されており、参加することを楽しみにしていた。今年度の発表はオンライン形式で、４つのセッションから１つずつのブースを選択し参加した。どのブースにおいても、参加者が１つの発表をじっくりと聞くことができたことからか、発表後、充実した質疑応答がなされたように感じた。本教育実践フォーラムに参加して、各発表はもちろんのこと、他の参加者からもたくさんの学びを得るとともに、今後も学び続ける意欲がさらに刺激された。また、自身の研究テーマにかかわりのある発表ブースに参加し、新たな視点や気づきを得ることができたので、今後の学びに生かしていきたい。

（２）パネルディスカッションについて

遠谷　優介（学級経営・授業実践開発コース）

パネルディスカッションでは、GIGA スクール構想について、県や市の教育委員会の方々、大学教授、附属小・中学校教諭の方々の話を聞き、現状や今後の見通しについて理解することができた。GIGA スクール構想については、今まさに学校現場は変化しているところで、各学校で試行錯誤をしていく段階だ。附属中学校での実践報告では、生徒自身が主体的にタブレット端末を活用していることや、タブレット端末を介して生徒達が教科横断的な学びができていることが紹介された。その話を聞き、教員側が遅れてはいけないと思った。また、教育委員会の方のお話にあったように、失敗を恐れずに挑戦し、困ったときは学ぶときだと考えて、動いていかなければならないと感じた。

大牟田　歩（教科授業実践コース）

パネルディスカッションでは、様々な立場・視点で GIGA スクール構想を見つめることができた。その中で、附属小・中学校による発表が特に印象に残った。国語科「書くこと」においては、タブレット端末の１人１台支給で文章の構成・推敲等の学習が格段にしやすくなる。タイピングを覚えなければならないという課題はあるが、高校卒業後は文書作成ソフトを使う機会が増えることからも「鉛筆よりも効果的」な学習になると考える。また、様々な資料が紙媒体でなく電子データでの配付や共有、提出となることで、児童生徒の学校生活や学びの助けとなる可能性も示唆された。新たな取組を前に戸惑いもあるが、生徒の目を輝かせられる教師になるために前向きに学び続けたい。

岩永　晋（子ども理解・特別支援教育実践コース）

GIGA（Global and Innovation Gateway for All）スクール構想の取組が、コロナ禍にみまわれ加速している。長崎県における現状と課題を知ることができる良い機会となった。県下の義務教育段階における、無線 LAN・端末の普及率に関しては全国平均よりも高い位置となっている。一方で、市町ごとに使用されている端末が異なるという背景を知ることもできた。今後、公平で充実した ICT が活用される教育現場に移行していくプロセスにおいて、様々な課題が生じると予測される。つまり、「想定できることと、想定できないこと」がまだ明確ではない状況であるということだ。パネリストの方々が「早く失敗することが大切である」と発言されたことが印象的だった。様々な問題を共有できる現場であるために、どのような意識と実践が必要なのか考えながら現場で ICT 活用を図りたい。

教育実践研究成果の発表概要

31 名の発表者による教育実践研究成果発表会が、令和 3 年 2 月 12 日、13 日の日程で、文教スカイホールを会場に開催された。本発表会は、理論と実践を架橋する教育を目指す中で、大学院生の多様な研究成果を地域や学校現場に還元することを旨としている。研究成果は、学級経営上の課題解決に資するものや教科授業の在り方を提案するもの、子ども理解や特別支援教育などの実践的な発表であった。また、これらに加え、管理職養成コース２期生の学校経営の指針を示したものも発表された。以下に、今年度の発表者とその発表概要を記す。

第 1 日（令和 3 年 2 月 12 日(金)）発表者(発表順)

1　廣岩　裕香　「美術の相互鑑賞における カウンセリング手法を基とした自尊感情向上に関する考察」

本実践研究では、美術の相互鑑賞において、カウンセリング手法を基とした手立てが自尊感情向上に有効かを検証することを目的とした。実態把握の中から自尊感情が低いことが、美術の作品に対する自信や自己決定の低さに影響をもたらすことが読み取れた。また、「積極的傾聴」や「構成的グループエンカウンター」の手法を用いた相互鑑賞会の取り組みは、「自信を持つ」ことにつながり、自尊感情の向上に効果があった。また、「短時間の相互鑑賞」や「教師の肯定的態度」を継続して実践し、「相手の作品を知る」ことが生徒にとって効果的な取組であると分かるなど効果を検証することができた。授業において、技術的指導だけでなく、自己受容が推進されるよう肯定的態度を継続して行ったり、そのような場面を設定したりすることも大切だと実感した。今後もどの生徒も自分の作品に対して自信を持って意欲的に制作できるような授業を実践していきたい。

2　野田　若菜　「クラスの実態に応じた良好な人間関係形成を促すための手立て」

本実践研究では、自分自身を理解し、友達とよりよい人間関係を構築できる力に着目し、そのような力を促進する実践の在り方について検討することを目的とした。実践として、通常学級内において、特別支援学級と通常学級間においての児童間のよりよい人間関係の構築に向けた取り組みを行った。実践を行い、より良い人間関係の構築のためには、①児童の自己肯定感を高めること、②仲間意識が持てる学級経営を随時行うこと、③長期的で継続的にできる自分や友達を見つめる、関わり合える活動を行うために、新たな活動を増やすのではなく、学校で日常的に行われる活動を活用すること、④特別支援学級に在籍する児童の実態に応じた相互作用の標的行動を決定すること、⑤他教員と連携することが大切であることが考察された。今後も児童一人一人に寄り添いながら、よりよい人間関係の構築に向けた様々な実践を考え、取り組んでいきたい。

3　中村　華子　「特別支援学校におけるプロアクティブな支援の在り方 ―事後的な対応に混乱を示すことが多い自閉スペクトラム症児を対象に―」

自閉スペクトラム症児を対象に、問題行動への対応ではなく日常生活における課題従事を促進するための支援としてプロアクティブな支援に着目し、特別支援学校において実施する上での具体的なプロセスを明らかにすることを目的とした。さらに、その実践が持続的に行われるための要因について検討することも併せて目的とした。実践した2事例ともに、ポジティブな結果が得られた。プロセスについて、いずれもアセスメントを行った上で標的行動および介入方法を設定した。また、標的行動との随伴性がある環境因子が定かである場合、その環境を調整することで、即時的に安定した効果が得られた。社会的妥当性について、支援者との協議を行い標的行動等を決定した方が高評価であった。支援が持続的に行われるための要因について、実践にかかる支援者の負担を小さくすること、実践によって高い効果が得られること、実践が対象児以外へ好ましい効果が得られることの3点が挙げられた。

4　脇田　将　「特別な支援を要する児童への 仲間との良好なコミュニケーションを促す指導・支援」

本研究では、特別な支援を要する児童を対象に、『モデリング』『教示』『リハーサル』『フィードバック』からなる行動的スキル訓練を用いた指導について検討した。特別支援学校においては、問題行動がもつ機能に着目して分析を行い、分析に基づいて行動的スキル訓練を行ったことで、不適切な言動の減少に効果が見られた。特別支援学級においては、児童の実態に合わせた指導教材を作成し、標的行動をより具体的に教示すること。実際の場面により近い形でリハーサルを行い、児童の行動に対して即時的に強化のフィードバックを行うことで、自発的な言語による援助要求が増加した。特別支援学校と特別支援学級いずれにおいても、指導の場面を学校の日常文脈に存在するやり取りの場面やそれに類似した場面にすることで、仲間との良好な関係を築くための指導に効果的であることが示唆された。

5　狩集　優子　「小学校外国語科における 児童の学びにつながる振り返りカードの検討」

本実践研究は、児童が外国語科の学習において目標を達成するためにどのように自己評価や自由記述をしているかについて、その内容を分類・分析することにより、児童の学びにつながる振り返りカードを検討することを目的とした。本研究で用いた振り返りカードには、目標に対する自己評価欄と学習についての自由記述欄を設けた。自己評価をすることは、児童にとって目標を意識し、自分自身の学習状況を把握するきっかけになることが分かった。また、児童の自由記述の分類・分析から、様々な観点から授業中の自分の学習を振り返ることができた児童は、結果的に目標を達成することができる場合があることが分かった。加えて、児童が記入した振り返りカードの内容を、授業改善に活用することができた。今後は、児童の記述に対する教師のフィードバックや児童同士の相互評価についても検討を行い、児童の自己評価能力や学習意欲をさらに高められるようにしたい。

6　山本　真太朗　「中学校数学科において学級全体で協力し合うための 対話的学びを取り入れた授業実践」

本実践研究では生徒同士が高め合い、ひとりひとりが輝ける中学校数学科の授業を計画、実践し、それを報告することを目的とした。また、授業の中でひとりひとりが様々な場面において多様な輝きを発揮できることは私の願いである。実践1では、手の中にある数学として、模型を作ることで教師の一方的な教え込みではない授業を展開できたが、対話の必然性を生徒が感じることができなかったことが課題となった。実践2では、対話を仕組む前に生徒の思考の整理を行うことで対話の必然性を生徒が感じることができたが、「教える-教えられる」の関係の固定化が課題となった。実践3では、正解が一つに決まらない課題の設定や個人個人のアイデアが評価されるオリジナルの作問演習により、「教える-教えられる」の関係の固定化は解消されたが、対話の際の視点を生徒が明確にもてなかったことが課題となった。これらをPDCAサイクルで研究することでひとりひとりが輝ける数学の授業の手がかりとなった。

7　古賀　きらら　「教師の授業省察における ふりかえりシート活用の効果についての一考察」

本実践研究では、よりよい授業づくりを目指して、教師の授業省察における児童のふりかえりシート活用について、考察を行った。ふりかえりシート作成の工夫として、毎時間授業者の授業のねらいに即したタイトルを与え、児童にはそのタイトルに関連することについて、ふりかえりを書いてもらうようにした。授業者の授業省察において児童のふりかえりシートを活用することで、授業者が授業中に見逃していたことや、気づくことができなかったことに、「なぜこんなことを書いたのだろう?」という疑問によって気づき、疑問を解決するために「もしかして…だからではないか?」と考えを導きだし、これまで自身になかった“引っかかり“を得ることができた。この”引っかかり“が多く得られれば得られる程、省察の視点を得ることができるのではないかと考えている。本研究では省察に焦点を当てたが、よりよい授業づくりを目指し、日々授業研究に取り組んでいきたい。

8　朝長　紗英子　「居心地の良い学級づくりに関する研究 ―教師の手立てに着目して―」

本実践研究では、居心地の良さの要素を「児童間の親しさ」「自然な自己開示」「規範意識」の３つと定義し、児童にとって居心地の良い学級づくりのためにはどのような手立てが効果的であるか、手立ての見取りや実践を通して検討することを目的とした。学級担任の手立ては、その前後の児童の様子と居心地の良さの要素において効果を検討し、①「言わない」指導、②児童主体の学級会、③班で話し合う場の設定、④「なぜ」を問う指導　の４つに整理した。授業実践では、リレー作文を用いた実践、道徳科「善悪の判断」における実践の２つに居心地の良さを高めるための手立てを取り入れ、観察やアンケート結果からその効果を検討した。本実践研究を通して手立てを検討した結果、①児童主体の活動形態、②児童自身に考えさせている、③指導に一貫性がある、④指導が段階的である　の４点が共通しており、これらの視点を基に手立てを講じることが重要であると示唆された。

9　土手野　佑介　「勇気づけを用いた授業デザインに関する考察」

本実践研究では、筆者の理想の学級である「児童同士が認め合い、主体性を引き出す学級」への手立てとして、親学習プログラム STEP に基づく勇気づけを用いた授業をデザインし、実践を通して児童への影響を考察することを目的とした。実習１～５にかけて、教師と児童・児童同士の関係性や褒めと勇気づけの違いに注目し、教師によって勇気づけられた児童の姿や教師の関わり方を観察してきた。本実践研究から筆者の児童への関わり方（言葉かけ）の変化や、1 教科 1 単元を通した勇気づけの授業の考案、児童の中で勇気づけようとした結果、鉄棒運動のポイントに沿った言葉かけが勇気の出る言葉となるといった成果が出た。ただ、実習の終了に伴い、その後の児童への影響や変化の観察が行えていない。今後も、筆者が担任教師として実践を行いながら、掲示物や他教科・教育活動全体への応用・汎用性を検討・検証し、理想の学級への手立てとなりうるのか考察を続けていきたいと考えている。

10　片山　桂維　「多面的・多角的な思考を促す教師の手立てに関する実践研究」

本実践研究では、実践実習１～５で得られた児童の実態や教師の手立てをもとに、多面的・多角的な思考を促す教師の手立てを取り入れた授業を計画、実践し、その成果を考察することを目的とした。各実践実習で得られた６つの教師の手立てのうち、「A) 考える視点を提示する」「B) 「心のものさし」を活用する」「C) 他者との意見交換の時間をとる」「D) 児童同士や教師と児童の間にズレを生じさせる」「E) 自己内対話をさせる」の５つを取り入れた実践を実践実習５において実施した。授業実践は同学年２クラスにおいて、道徳科の授業を実施し、同教材を用いることとした。授業実践において、自己と他者の価値観の違いに気付き､各々の価値観に基づいて議論することを通して、価値の葛藤に悩んだり、自己の考えを再構築したり強化したりする様子が確認できた。このことから、５つの手立てを相互関連的に講じることで児童の多面的・多角的な思考を促しうる可能性が示唆された。

11　鵜林　慎平　「思考力を育む高校日本史授業の開発と実践
―歴史的思考力の育成に焦点を当てて―」

本実践研究では、生徒の歴史的思考力を育成する高校日本史授業の開発と実践を目的とした。研究にあたっては、先行研究や授業実践例をもとに、本実践研究における歴史的思考力について、「①歴史的事象を認識し、知識として獲得する力、②歴史的事象を構造的に理解する力（要因・因果関係等）、③歴史的事象の歴史的意義・時代概念を考察・解釈する力」という３段階で捉え、発展的に育成していくという形で定義した。授業実践から、「②歴史的事象を構造的に理解する力」については複数の視点から事象の要因や因果関係を考察する学習を通してその育成を図ることができた。一方で、「③歴史的事象の歴史的意義・時代概念を考察・解釈する力」については、授業者が持つ歴史認識を生徒に理解させることはできたものの、生徒自身に歴史に関して解釈させることはできず、その育成に資する授業を実践できなかった。今後は現場での実践を通して研究を深めていきたい。

12　田尻　理香　「振り返りで追究する小学校国語科授業」

国語科授業において、教師の指導改善に資する形成的な評価と児童の学習改善に資する振り返りを機能させ指導と評価の一体化を図る。教師は個に応じた指導の手立てを講じ､次時の授業を柔軟に構想する。また、児童が振り返りにより学びをメタ認知できるようにし、見通しをもたせる。実習校と在勤校の２年間で取り組んだ実践研究の成果として、言語活動という外的動機付けから、形成的な評価と振り返りを機能させると、指導者は実態を細かに把握でき、授業を柔軟に構想できること。児童は内発的な動機付けのもと、学習課題を解決しようと努めるようになり、見通しをもちメタ認知能力や自己肯定感・自己有用感が醸成され、波及的に学級集団として、支持的風土が浸透していくことがあげられる。今後は、学年段階を追って振り返りを質的に変化させ、指導改善と学習改善を継続することにより、「自分で自分の背中を押す、自律した学習者」を、授業の中で育成していく。

13　山隈　俊　「中学校技術・家庭（家庭分野）における
学習内容の的確な理解を促す手立て」

本実践研究は、知識・技能に着目し、中学校技術・家庭（家庭分野）における、学習内容の的確な理解を促す手立てとして「小学校時代の学び直し」「復習」「日常生活との結び付け」「ゲーム」「映像」を用いた授業を構想・実践を通して、有効性を明らかにすることをねらいとしている。授業実践から、「小学校時代の学び直し」は、発展した知識を問う前に基礎の知識を思い出すため、授業を円滑に進めることができ、「復習」は難しい部分を反復し、定着を行うことができ、「日常生活との結び付け」は、生徒からの意見を円滑に引き出すことができ､「ゲーム」は遊び感覚で知識の習得や確認をすることができ、生徒自身の学ぶ意欲向上にもつながる。「映像」は、口頭や板書のみでは伝わりにくい部分でも視覚的捉えることで理解を促すことができることが分かった。本実践研究の成果を基に今後も様々な授業を構想し、的確な理解を促せる授業を作っていきたい。

14　清島　はるみ　「中学校外国語科における生徒の語彙力を高めるための指導
―語彙の結びつきを意識した帯活動を通して―」

本実践研究では、語の様々な知識の側面の結びつきを意識した語彙指導を実践し、その有効性を検証し、その結果から効果的な語彙指導の在り方について検討することを目的とした。本研究では、「語彙力を高めること」を語彙の量的な側面と質的な側面の両面の知識を伸ばすことと見なし、分析に当たっては、会話や英作文での、述べ語数や異なり語数をもとに語彙力を測定した。指導に当たっては、「発信語彙は単元・学年などを越えて繰り返し提示・練習するなどの工夫を行う(文部科学省 2017)」ことの必要性から、授業の最初に行う帯活動における意図的語彙学習と Small Talk を中心に実践を行った。事前、事後テストの得点の変化や抽出生徒の使用語彙から、語彙知識の諸側面同士を結び付けた活動や語を他の語と結び付ける活動は、生徒の語彙力向上に有効であることが示された。本研究の成果と課題を生かし、生徒のコミュニケーション能力を育成するために、自分に何ができるのか、何をすべきなのか、これからも問い続け、教師としての資質・能力を高めていきたい。

15　兵頭　美帆　「高等学校外国語（英語）で身につけるべき資質・能力を育成するための授業づくりを目指して」

本報告の目的は、高等学校外国語（英語）の授業を通じて、教科書の読み物教材が、高等学校学習指導要領で求められている資質・能力の向上が可能かの検証である。そのために、求められる資質・能力を教育界、経済界、OECD が提唱するキー・コンピテンシー、勤務校の教育方針から整理した。次に、資質、能力、態度の言葉の意味の変容を時代ごとに明らかにした。それから BEVI(The Beliefs, Events and Values Inventory)を用いて対象生徒のコンピテンシーを測定し、教科書の読み物教材でコンピテンシー伸長のための授業を行った。最後に実践からの課題と克服方法について考察した。この実践研究を通して、教科書の読み物教材は生徒の資質・能力を向上させるのに十分に利用する価値があり、短期間の実践でも生徒に変容をもたらした。変容しなかった生徒への授業の際の工夫を授業内で継続的に取り組む。これからも次代を担う社会の創り手となる生徒の資質・能力の向上を目指した授業づくりを実践したい。

16　溝上　美由希　「国語科における読むことと書くことの関連を通した「思考力､判断力､表現力等」の育成 ～記述に着目して～」

本研究では「書くこと」に着目し、生徒たちに「読むこと」と「書くこと」を関連付けた授業を通して「思考力、判断力、表現力等」を身に付けさせることを目的とし、実践を行った。特に、授業内での「記述」及び授業後の課題における「記述」に着目した授業実践を通して、その可能性と課題を検討した。実習校である現勤校において、高等学校１年の国語総合を担当し、授業内の記述の活動に加え、現代文の授業で取り扱った教材について、感想や意見文などの２００字から８００字の作文をさせ、その記録を取った。実践の成果として、生徒の読みの深まりや思考の深まりを、継続的に行った記述を通して見ることができたのではないかと考える。生徒たちがそれぞれの課題に対して自らの意見を持ち、読み取ったことを踏まえて文章として表現する、という活動を一単元の授業にとどまらず継続的に導入することで、よりその学びの深まりを見て取ることができたのではないかと考える。

第２日（令和３年２月 13 日(土)）発表者(発表順)

17　小川　大輔　「ICT を活用した高等学校理科の化学における実践研究 ～実験の知識･技能に着目して～」

本研究では、教育の情報化や高等学校の理科の現状を背景に、実際に実験を行うかわりに、映像ベースのシミュレーションを生徒に体験してもらうことで、実験の知識・技能を獲得させることができないか検証を行った。本研究で使用したシミュレーションは、実験映像を組み合わせて作成したものである。結果は、シミュレーションは実験をわずかに下回る水準で実験の知識・技能を獲得させることができることがわかった。実験がほぼ行われていない現状を踏まえれば、シミュレーションを活用する価値はあると言えるだろう。また、シミュレーション中に設問を加えることで、実験の知識技能の獲得率が高くなることがわかった。課題としては、シミュレーションでは実験器具に関する内容が身に付きにくいことや、感覚的な技能までは身に付けさせることができないため、シミュレーションだけではなく、必要に応じて実物と組み合わせて補っていくことも重要であることがわかった。

18　太田　一成　「地理的思考力育成をめざす中等地理教育の実践研究」

本研究では、地理的思考力育成をめざす中等地理教育の実践研究を行う。本研究では、地理的思考力育成をめざすため、動態地誌的授業、系統地理的授業、社会問題地理的授業の３つの理論について検討を行う。また、検討を行った授業理論を基に授業の開発、実践を行い考察する。動態地誌的授業の主な成果は、特定のテーマとなる地域事象を中心に扱う理論であり、地域事業を他の地域事象との関係を基に扱うことで地理的思考力を育成できる点である。系統地理的授業の主な成果は、一般的な原理、法則を中心に扱う理論であり、一般的な原理、法則を追究したり適用したりすることで地理的思考力を育成できる点である。社会問題地理的授業の主な成果は、社会問題を中心に扱う理論であり、社会問題を地域に視点をおいて考察し構想することで、地理的思考力を育成できる点である。

19　山口　慎太郎　「個に働きかける一斉指導法による主体的な学びの実現 ～教科指導の中で機能する生徒指導の実践を通して～」

一斉指導は、集団内の個に考慮を払うことを重視するものとしても意味をなす。本実践研究は、一斉指導の形態でありながら個々の変容を促す効果的な指導法を探ることを目的とした。教師の指導観により表出する指導行動はそのまま生徒指導として機能し、生徒の人格形成に影響することも踏まえ、１単位時間の教科授業において、次の①～③の指導行動を一斉指導により行った。①授業冒頭で場の良き在り方（学びの価値や風土）を示したガイダンスを行う。②その後は場を生徒に委ね、ガイダンスに照らした見取りに徹する。但し、好ましくない行動には全体の活動を止め、一斉指導の形態で介入する。③授業終末で教師のＩ message によりフィードバックを行う。その結果、行動の価値理解の促進や判断基準の適切性を高められることが、個々の行動変容により確かめられた。場の醸成が生徒の自己指導能力を高め、教科の学びにおける主体性に繋がることも示唆された。

20　山口　真優　「古典における生徒の興味関心を引き出す授業に関する考察」

本授業実践は、生徒への古典に対する意識調査の聞き取りや古典の授業実践を通して古典における生徒の興味関心を引き出す授業について明らかにすることを目的としたものである。古典、和歌、漢文の授業実践を通して成果と課題について考察し、古典における生徒の興味関心を引き出す授業の条件は①生徒が授業内容をしっかり理解できていること、②授業の中にアクティブな活動があること、③教科書を読むだけでは解けない問があることの３つであると考えた。これまでの授業実践の成果として①と②は達成できたが、③については課題が残った。また全体の課題としては、授業が楽しいだけで終わってしまい多くの生徒の興味関心を引き出すまでにはいたらなかった部分があった。また、本来この研究は「生徒が古典を学ぶ意義を見出すための授業」をテーマとする予定であったがその域まで至ることができなかったため、今後も授業研究を通して明らかにしていきたい。

21　小関　一輝　「高等学校英語科における話す領域の効果的な言語活動について ―コミュニケーションストラテジーに焦点を当てて―」

本実践研究ではコミュニケーションストラテジー指導を取り入れた言語活動の有効性について考察を行った。実践授業内の活動で生徒の発話を録音したところ、指導の有効性が確認できた。課題としてコミュニケーションストラテジーや有用な表現の提示方法が挙げられる。また、言語活動としてペアトークを帯活動として継続的に行ってきたが、トークテーマの内容を生徒の実態に合わせて工夫することも必要である。今後は、トークテーマを生徒理解の上で設定すること、帯活動以外での言語活動での指導でもコミュニケーションストラテジー指導を行うこと、活動内で生徒の「やり取り」を評価するために自己評価や相互評価の方法を検討することを行い、生徒がより効果的に英語での「やり取り」を行えるような授業づくりを目指していきたい。

22　秋山　壽哉　「「活力ある学校」づくりへ向けての組織マネジメントに関する研究 ～同僚性・協働性を意識した管理職の関わりに関する一考察～」

管理職の役割には、「わたし」と「あなた」という主体性や合理性をもった個人が存在することを前提とした結びつきやつながりを広げ、個人を伸ばす・活かすこと、組織全体の力を高めることがあると考える。そこで、本研究においては、「同僚性・協働性」に着目し、個業意識や疎結合組織からの転換を試みることとした。具体的には、実習校における聞き取り調査や参与観察、先行研究などから得た知見と経験とを融合させた提案を行った。①校長等として「人材育成」に関するC(Context)-PDCAサイクル、②　「教員育成指標」を活用した管理職の関わりの具体（面談等）、③「直接的・間接的・婉曲的関与」の具体（日常の関わり）の３つ方策を講じて、自律的に変革しようとする教職員を、敬意をもって支えていくことを目指す。管理職養成コースの二期生としての誇りをもち、院での学びやネットワークを生かしながら教育の充実と発展に寄与していきたい。

23　江口　敬文　「日常的に教員育成を図る校内組織の構築に関する研究」

教員の大量退職・大量採用時代を迎え、校内で教員育成を図ることの重要性が増している。しかし、学校の現状は、教職員の業務の多忙さや、研修時間の確保の困難さも問題として挙げられており、校内で教員育成を図ることは重要であるが、効果的・効率的に行っていく方法を模索していく必要がある。そこで、本実践研究では、日常的に教員育成を図る校内組織の構築に関して考えることとした。１年間の学びをとおして、「対話」によって、教職員に学校づくりに参画しているという当事者意識や自己効力感、達成感等を抱かせ、どれだけの教職員が思いを重ねることができるかが重要であるということが分かった。そのためにも、管理職は、自校の学校組織の成熟の状態や校務をとおした教職員間のつながりを的確に把握し、実状に合わせた学校組織文化の醸成と教員育成が求められる。今後は、教職員が育ち合う学校組織文化を醸成する方策をさらに追究していきたい。

24　加藤　稚子　「地域と共にある学校を実現する管理職の働きかけ ～中学校における「つながり」づくりの事例分析～」

本研究では、学校と地域の「つながり」づくりの方策と、管理職の働きかけについて明らかにすることを目的とした。実習校でインタビュー調査を行い、「つながり」づくりの過程と管理職の働きかけを調査した。そこで見えた校長の役割は、①積極的に人を繋ぎ顔の見える関係を築くこと、②学校の教育活動と地域の人的物的資源をつなぎ、生徒の良い変化が期待できる取組とすること、③その結果現れる教職員の多忙感などの阻害要因について丁寧に対応していくことであった。さらに、校長は様々なことを俯瞰して見る力とポジティブなリーダーシップが必要であることが分かった。校長の地域連携への期待や行動力、発言は地域や教職員に伝播していく。これが、「つながり」を強くし、学校と地域が共に教育を行う関係へと成長していくと考える。今後は本研究で得た知見を活用し、赴任校で地域とのつながりを豊かにし、子供たちのより良い教育を地域と共に行っていきたい。

25　馬場　諭治　「学校の教育力を高める人材育成に関する考察 ―若手教職員を育成する校内での環境づくりについて―」

本研究は、若手自身の学ぶ意欲を高め、教職員１人１人を若手育成の当事者とするために、管理職はどのような環境を整え、どのように働きかけてゆけばよいかを明確にすることを目的とした。公立小学校、国立大学教育学部附属学校において、若手育成の実態をインタビューや参与観察によって調査し、若手教職員を育成する校内での環境づくりを、「子どもの学力保障を中心に据えた日常の業務や、教職員全体の人材育成に包摂されたものとして、管理職・教職員総がかりで行うことを基本方針とし、管理職が教職員の意識を変えることで、教職員自身が、日常の取組の質を若手が学びやすい配慮のあるものに変えていくこと」と定義した。管理職が若手育成を俯瞰するための「若手育成の要点 全体構造」と、教職員が学校の実態に応じた若手育成を共通実践するための「若手育成の環境表」を作成した。今後は、本研究で得た知見と成果物を自らの実践に活用し、本研究の検証・改善に取り組んでいく。

26　林田　健一　「創造的な学校をつくる授業研究の在り方 ～学び続ける教師を支える管理職の関わり～」

本研究は、創造的な学校をつくる授業研究の実現に向けた管理職の関わりについて提案したものである。創造的思考を基にした授業研究を【１．創造的思考段階(①準備期②醸成期③構成期④検証期)】【２．授業実践段階】【３．授業の振り返り段階】【４．研究の検証と再構成段階】という段階で考えた。【１．創造思考段階】の「①準備期」「②醸成期」で、教師の創造性を引き出す管理職の関わりが特に重要となる。また、【３．授業の振り返り段階】【４．研究の検証と再構成段階】で、学び続ける教師を支える管理職の関わりが、特に必要となる。これらの管理職の関わりを「組織に対する関わり」「教師の創造性を育てる計画的、意図的な関わり」「学び続ける教師を支える連続性、継続性のある関わり」という視点から考えた。大学院で学んだ理論とこれまでの実践を往還しながら追究する中で、今後の課題への自覚ができた。今後も、本研究について継続的に追究していく。

27　福田　浩久　「地域や家庭との連携・協働によるカリキュラム・マネジメントに関する考察 ～目標や育成すべき資質や能力の共有の在り方について～」

本研究では、カリキュラム・マネジメントを推進する際の校長の役割を明らかにすることを通して、社会に開かれた教育課程の実現をめざすことを目的とした。社会に開かれた教育課程の３条件の観点から先行研究や実習校・県内小学校長へのインタビュー調査の結果を分析した。その結果、条件１（目標の共有）では、まず全職員間で目標を共有することや地域・家庭に対しても年度当初に目標等を示す必要があること、条件２（資質・能力の共有）では、全職員で議論して明らかにした資質・能力を日々の教育活動の中で育み、その姿を通して地域や保護者に理解してもらうことが共有につながること、条件３（人的・物的資源の活用等）では、計画とともに成果や課題についても共有する機会を設けることや学校側からの一方的な要請でないかを職員に意識させるとともに逆に地域のニーズを受け止める重要性が明らかになった。この学びを今後の職務に生かしていきたい。

28　松田　禎治　「学校経営方針の共有を図る管理職の具体的方策に関する研究 ―職員・地域とともにある学校づくりに向けて―」

本研究は、管理職が、職員や地域と経営方針を共有するための具体的方策を明らかにすることを目的とした。経営方針とは、「学校経営計画の戦略を明らかにしたもの」であり、共有とは、「経営方針が職員・家庭・地域に広く知れ渡り、共同実践者としての意識と行動力をもつ」という意味で捉えた。経営方針をグランドデザインで示すことの可能性を検討する中で、「わかりやすさ」＝アクセシビリティの要素が含まれることに気付き、活用例を示すことができた。この気付きは、あらゆる講義で得た知識と結びつきながら、少しずつ学びに変化したと感じている。学校で起きる事象をわかりやすく捉え直す思考を大切にする。そして、現場にしかない問いと答えを見つけながら職員・地域とともにある学校づくりを実現していきたい。

29　宮嵜　和香　「「チーム学校」づくりのための組織マネジメントに関する研究 ～つながりを生み出す管理職の働きかけを通して～」

本研究の目的は、子供たちを取り巻く複雑化・困難化した課題に対応する上で、学校全体で教育活動に取り組み、高い専門性を持つ多様な人々との連携・協働を推進する「チーム学校」づくりのための管理職の働きかけを明らかにすることであった。調査実施校でのインタビューや参与観察を通して、当初、考えていた視点以外にも新たな場所で、視点を踏まえた働きかけがあることが分かった。連携・協働を進めるには、方針の共有・提示を適切に行い、進むべき方向性をそろえること、教職員が活躍できる機会や場を多くつくること、子供の将来の姿までを見据えた指導･支援を行うこと等が重要であると考える。また、これらの基盤となるものが「連携・協働の当事者であるという意識」と「よりよい連携・協働をつくろうとする風土」である。今後、学校現場での検証と改善を繰り返し、子供たちの豊かな学びと育ちを支える「チーム学校」づくりに向け、実践を重ねていきたい。

30　元村　義信　「持続可能な組織力を培う 学校組織マネジメントの在り方に関する研究」

管理職養成コースの学びとして、自らの考えを言語化することの難しさとその必要性、正解ではなく納得解を見出していくこととその際の対話の重要性等を学んだ。これらの学びを進めると同時に、私は「学校の組織づくり」について、個々の教師が協働意欲を高め、自己の力の向上と学校改善への意欲が結集する学校組織体となるための管理職の組織への働きかけを実践事例から明らかにすることを試みた。そこで明らかになったことは、組織を動かすことの底流にあるものは、手法的・技術的なマネジメントではなく、人や組織、地域社会などのつながりを意識し、つなげていく全体的・俯瞰的な管理職の働きかけが必要であり、学校組織充実のためにこそ、一人の教師にこだわらなければいけないということである。これらの学びを勤務校での実践に活かし、持続可能な組織力を持った学校づくりに取り組んでいきたい。

31　山田　芳幸　「初任・若手教師の育成を中核にした 育ち合う組織づくりに関する研究」

本研究の目的は、管理職として、「初任・若手教師の育成」を中核にした育ち合う組織づくりの具体的手立てや方策を明らかにすることであった。そこで、先行研究の検討、県内４名の初任者指導教員へのインタビュー、実践実習での参与観察をもとに調査を進めた。初任・若手教師の困難の内実が明らかになり、管理職として具体的な手立てや方策を自分なりに視覚化してまとめた。本研究を進めていく中で、問題として強く感じたことは、「遠慮」の存在である。初任・若手教師のみならず、他の教職員や初任者指導教員までもが、それぞれに遠慮をしていることから、管理職の働きかけが重要であることを再確認することに至った。今後、勤務先での実践を通して、本研究の検証を行うとともに、管理職として育ち合う組織づくりの構築に尽力していきたい。

発表

司会

長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻
令和２年度教育研究成果報告書

令和３年３月発行
編集・発行者　長崎大学大学院教育学研究科
〒852-8521 長崎市文教町1－14
電話(095) 819-2263
印 刷 ・ 製 本　H.P.第一